

シリアの今後と アメリカ

Syria

中東が大きく揺れています。当会では6月に、「二期目のオバマ政権と中東」というタイトルで、放送大学の高橋和夫教授の講演会を開催しました。大変に関心が高く、多くのご参加を得ました。当日は長時間にわたって、中東和平やイラン、トルコの状況についても非常に白熱したお話をさせていただきましたが、誌面の都合上、シリア情勢に関わる部分をご紹介します。講演会から2カ月たって、高橋さんの予想通りの展開になってきました。



放送大学教授 高橋和夫さん

シリアは旅行者にはすごく居心地のよいところでした。でも住んでいた方に聞くと、日本語で「アサド大統領」と言っても秘密警察に聞かれていると思うから、「アサちゃん」とか「おじさん」とか言っていたそうです。警察力で国民を押さえつけていた国なんです。そのシリアで民主化運動が起こって、軍隊が出てきて国民を撃ちまくっているという状況です。

民主化すればいいじゃないかということですが、シリアは単純化すると、国民の7割ぐらいがスンニ派で、1割ぐらいがアラウィー派、他に2割キリスト教徒などがいます。つまり少数派が政権を握っているわけです。だから選挙をやったら絶対にスンニ派が勝ちます。今権力を持っている人たちは権力を手放したくないから、選挙なんかやれないのです。

アラウィー派は貧しくて、山の中に住んでいて、昔はすごく差別されて虐められていた。イスラム教徒としても認められていないという時代がずっとあった。そういう人たちがどうやって権力をとったかという、軍を掌握

したからです。

第一次世界大戦後シリアを支配したフランスは、自分たちの下請けをさせるためにシリア軍を創ったわけです。貧しく、仕事が無かったアラウィー派の子どもが勉強したかったら、授業料のいらない士官学校しかない。気がついたらシリア軍のかなりの部分が、アラウィー派などの少数派に占められるようになった。そして、クーデターを起こして権力を取っちゃったわけです。だからアラウィー派の旧世代は自分たちが貧しくて蔑まれて虐められていた時代をすごくよく覚えているんです。

南アフリカ型和解の可能性は低い

権力を手放した人がどうなったか。アルジャジーラTVはシリアでも見られます。ムバラクさんは鳥籠に入れられて裁判に引っ張りだされ、カダフィーさんみたいに殺されたりした人もいて、権力を手放すとああいう事になるんじゃないかと思う。アサド政権

が生き残るために戦っているのではなくて、アラウィー派の生き残りのために戦っているんですよ。だからアサドの首が飛ぶか飛ばないかは重要な問題ですけれども、アサドが辞めると言っても片付く問題ではないんです。

どうやったら解決するのかという、それは報復無き民主化です。アラウィー派が権力を手放したら報復したりしない、となればいい。南アフリカがそうでしたよね。マンデラさんが権力を取った時、白人を引っ張りだして「お前、拷問したから死刑だ！」なんて言わなかった。「私は拷問しました。ごめんなさい。」って言ったらずれで許したんです。でもシリアにはそんな雰囲気は全然なくて、内戦がずっと続くでしょう。悪くするとシリアという国がバラバラになるという気がします。

スンニ派の指導者の一人がインタビューで「政権とったらアラウィー派をどうするんだ？」と聞かれて、「決まっているじゃないか。あいつら殺しちゃって、ミンチ肉にしてやるんだよ。」と言ったそうです。みんながみ



んなそうだとは思わないんですけれど、スンニ派の一部は非常に過激です。アラウィー派の人たちはこうしたことを見聞きすると「ああやっぱり権力は手放せないな。死ぬまで戦うしかないな。」と思ったんじゃないでしょうか。

そのスンニ派も最初は弾圧されていましたが、いまだだん武器が入ってきて戦っているわけです。しかもシリア人だけではなくて国外の勢力も入ってくるという状況です。

アサド派はアラウィー派とその他の少数派、反アサド派はスンニ派。クルド人は真ん中にいる。ロシアがアサド派、欧米やトルコは反アサド派の民主的な人たちを支援するという事になっていて、イランがアサド派を支持している。で、反アサド勢力のイスラム的な人に対してはカタールとかアラブ諸国が支援している状況になっています。

シリアがバラバラになる

外国から入ってきて、実際に戦闘をやっている連中は、レバノンのヘズボラーというシーア派の組織、そしてアラブ世界全体から押し寄せているアルカイダ系の人たちです。ヘズボラーというのはずっとイスラエルと戦争してきましたから、ある意味中東では最強の組織です。イスラエルほど近代兵器を持っていないだけで、訓練もしているし、死んだら天国に行けると本気で思っている人も多いし、何よ

りも実戦体験を重ねているから強い。だからヘズボラーが入ってきて、戦局がアサド政権側に有利に傾き始めたという状況です。

しかしアラウィー派は将来劣勢に立つ事になっても、多分北部の山岳地帯にこもって戦い続けるんじゃないでしょうか。したがってアサド政権がひっくり返って平和な民主的なシリアができるとは考えにくくて、シリアという国がバラバラになる可能性が高い。アラウィー派の国、アレッポを中心とするスンニ派の国、ダマスカスを中心とするスンニ派の国に分かれるだろう。それに、これまで全く権利を認められなかったクルド人もこのまま内戦状態が続けば、独立に近い状態になるだろう。戦国時代の群雄割拠みたいになってしまう構図しか見え、決して平和で民主的で統一されたシリアというのが、見えてこないという感じであります。シリア状況は、どう転んでも明るくないというのが私の印象で、国連の発表だと10万人ぐらいがすでに亡くなったということです。

アメリカの出方

先週アメリカが、シリアの反政府勢力への武器供与を発表しました。裏ではこれまでもそういう動きがあったと言われますが、一期目のオバマ政権では、クリントン国務長官やペトレイアスCIA長官が反政府勢力への肩入れを主張したものの、オバマがやりたくないということで、アメリカは関与してこなかった。オバマがずっと、「レッドライン(この線を超えたら許さない)」と言っていたのは、化学兵器をシリアが使ったらということです。去年から化学兵器が使われているという未確認の情報はたくさんでいたんですが、シリア政府が使っているの

か、政府軍から寝返った反乱軍が化学兵器を持って使ったのかははっきりしなかった。最近になってアメリカは明らかにシリア政府軍が化学兵器を使ったからと言っています。したがってどの程度かは別にしろ、アメリカが反政府側に直接兵器を渡すという状況になっているわけです。

でも反政府勢力への支援に力が入らないのは、もちろん国民が乗気でないからです。世論調査で「反政府勢力に兵器を送ることをどう思いますか」と聞くと、フランスでは賛成25%で反対は60%を超えている。イギリスも賛成25%くらいで反対は50%近い。アメリカでは賛成は20%ちょっとで反対が圧倒的。ドイツも反対が圧倒的という状況で、もう中東での戦争にかかわるのは勘弁してよ、というのが強い世論なわけです。オバマ政権が武器供与と言っても、最近のギャロップの世論調査では、支持が37%で反対が54%。国民の大半は「関わりたくない」、ということなんです。

なぜか。イラクとアフガニスタンの戦争で疲れているからです。去年ワシントン郊外のアーリントン国立墓地に足を運びました。アメリカは何千人もの死者を出して疲れているんです。もう戦争はいい、という雰囲気がありありとしています。戦友のお墓で泣き崩れている人がいました。案内の人にオバマ大統領は来たのかと聞いたら、もう数回来たと言っています。だからオバマは自分が決断すればここに結果が出る、というのが非常によくわかっているようです。新しい墓石がどんどん増えています。新聞とサンドイッチと水とパラソルを持って日曜日に来ているお母さんがいました。一日中、息子のお墓のそばにいたいんですね。戦争するという事はこういう事なのです。

6月23日 東京・お茶の水